

ヨハネの黙示録

前半のビデオではヨハネがこの黙示的な預言を
小アジアの7つの教会への回覧状にしたことを見ました
それは信仰が冷めてしまった信徒たちや
ローマ帝国の迫害から苦しめられていた教会員を励まし慰めるためでした
またヨハネがおもに用いるイエスの象徴
敵のために死ぬことによって勝利した屠られた子羊についても見ました
彼こそ神の王国が天にあるように地にも到来させる計画を記した巻物を解く方です
巻物を開くとエジプトへの災いのような警告の裁きをもたらされました
がファラオと同じように国々も悔い改めませんでした
次に多民族からなる子羊の軍隊が現れ
開いた巻物が彼らの奇妙な使命を告げています
それはたとえ殺されることがあっても
神の正義と憐れみを獣のような国々に証しすることによって子羊に従うことでした
そして子羊がそうしたように彼らも命を投げ出すことによって獣に勝利し
それが国々を悔い改めに導くのです
この書の後半でヨハネはこの獣と彼が神の民にしかける戦いについて
また物語全体がどのように終わるかについて記しています
7つのラッパについて書き終えるとヨハネは今までの7のサイクルを一旦止とめ
彼がしるしと呼んだ幻を記述します
しるしとは象徴という意味でこのセクションではあらゆるしるしが登場します
これらの幻は開かれた巻物の意味をさらに深く掘り下げます
最初の幻は
ローマの迫害で苦しめられている7つの教会の背後で起こっている
天上の霊的な戦いを示しています
これは創世記3章で始まったそもそもの戦いがここでも登場しているのです
すべての悪の源であるへびはここでは竜として描かれています
竜は女性と彼女の赤ん坊を攻撃しますがこれはメシアとその民を表しているのです
メシアはご自分の死とよみがえりを通して竜に打ち勝ち
竜は地に投げ落とされました
竜は地上でメシアの民に対する憎しみや迫害をかき立てようとしますが
メシアの民はたとえ殺されても彼の及ぼす力に抵抗し続けることで
竜に打ち勝つのです
ヨハネはここで本当の敵はローマでもほかの国でもなく
人でもないことを教会に対して示そうとしています
霊的な闇の力が働いていますがイエスの信徒たちは屠られた子羊に倣い
誠実でありつづけ敵を愛することによって
イエスの勝利を宣言することになるのです
ヨハネは次の幻でも同じ対立を描きますが
今回はダニエル書に出てくる獣の幻という地上の象徴を通してです
ヨハネは竜に力を与えられた2頭の獣を見ます
一頭は暴力で征服する国の軍隊を表し
もう一頭は自分たちを神のように見なす経済至上主義の組織の象徴です
この獣たちは国々に絶対的な忠誠を求め
それは獣の数字である666を額か手に刻印させることに象徴されています
これは悪名高きイメージですがこの本当の意味は
現代の出来事にまつわる数字を操作して分かるようなものではありません

ヨハネはここで明らかにヘブル語の旧約聖書を参照しています
この刻印はシエマに対抗するものなのです
額と手に書くということはシエマつまり申命記に書かれている
古代ユダヤ人が神に忠誠を誓う祈りのことを指しています
この祈りは
すべての思いと行動を唯一まことの神に奉げることの象徴として
額と手に書かれるものなのです
それが今や反逆した国々が人々の忠誠を求め
自分たちに従えと決断を迫ります
そして何世紀もの間
多くの人の興味を掻き立ててきた獣の数字があります
しかしヨハネにとってはこれは謎ではありませんでした
彼はヘブル語もギリシャ語も話しましたが
ヘブル語のアルファベットは数字に置き換えることができます
ネロカエサルまた獣というギリシャ語の言葉をヘブル語で書くと
いずれも合計が 666 になります
しかしヨハネはネロだけがこの幻を成就していると言っているではありません
自分の軍事力や経済力を誇り自分が神になろうとして
民に絶対的忠誠を求めるすべての国は獣になるのです
このパターンはダニエル書の時代から続き
ネロはその最近の例に過ぎません
ダニエルの時代の獣はバビロンでしたが
ペルシャギリシャがそれに続きヨハネの時代はローマだということです
そしてこの後も同じことをする国はやはり獣になるのです
そして獣のような国々と竜に立ちはだかった王こそ屠られた子羊です
彼の軍隊は命にかえても彼に従った者たちです
彼らの勝利の歌をヨハネは永遠の福音と呼び
それは新しいエルサレムから流れ出て国々に届きます
彼らはすべての民が悔い改め神を賛美し
滅びの日が定められているバビロンから出るようにと呼びかけます
次にヨハネは最後の裁きの幻を見ますが
それは 2 つの収穫に象徴されています
一つは王なるイエスが来て彼に誠実な民を集める良い穀物の収穫です
もう一つはワイン用の葡萄の収穫で
これは悪に酔いしれていた人たちを表しています
彼らはぶどうをつぶす踏み場で踏みにじられます
これらのしるしの幻を通してヨハネは 7 つの教会に厳しい選択を迫っているのです
バビロンの誘惑を退けて子羊に従うのか獣に従って
その敗北を味わうのか選択肢を明確にしたところで
ヨハネは 7 つの鉢に象徴される最後の 7 つの裁きの幻を明らかにします
子羊の巻物やしるしの幻から国々の多くは悔い改めますが
一方で出エジプト記の災いが今回は鉢から注ぎ出されても
悔い改めない人々も大勢います
彼らはファラオと同じように神に反抗し神をののしったのです
その結果 6 つめの鉢が注がれ竜と獣がハルマゲドンと呼ばれる場所で
神の民と戦うために国々を招集します
ハルマゲドンとは北イスラエルの平原を指していて

イスラエルはかつてここで侵略してくる多くの国と戦いました
6 つめの鉢はこれから起こる特定の戦争のことだと考える人々もいます
悪に対する神の最終的な裁きの隠喩だと考える人々もいます
どちらにしろヨハネがここでエゼキエル書にある
神とゴグの戦いのイメージを参照していることは明らかです
ゴグは神の正義に対立して集まった反逆的な国々の象徴です
そして神の正義は7 つめの鉢で現わされます
これが四回目にして最後の主の日の描写で
国々にはびこる悪の決定的敗北が記されています
ヨハネは子羊が封印を解いた巻物のメッセージを
すべて書き尽くしましたここで
これまで紹介した3 つの大きなテーマに戻って焦点を当てます
バビロンの滅亡と悪を打ち負かす最後の戦いと
新しいエルサレムの到来についてです
これらはすべて最終的な神の国の到来について
それぞれ別の角度から書いているものなので
まずはバビロンです
御使いはヨハネに女王のように着飾った女性を見せましたが
彼女は殉教者たちと無実の者たちの血に酔い
しるしの幻に出てくる竜のような獣に乗っていました
これは反逆的な国々の象徴で彼女はバビロン大淫婦と呼ばれています
この幻で詳細に語られているイメージは
ヨハネの時代の読者にはすぐわかるものでした
ローマの軍事力と経済力を擬人化しているのですが
それだけではありません
この幻の中でヨハネはバビロン ツロ エドムの滅亡に関する
旧約聖書の記述に出てくる言葉を織り込んでいます
それによってローマが旧約聖書に出てくる神に反逆する人々の
典型の最新のものに過ぎないことを示しているのです
彼らは寄り集まって
自分たちの経済力と軍事力を神とするような国家を形成します
このことは過去にも未来にも限られたものではありません
いつの時代も変わらない人間の性質を表していて
いくつものバビロンが現われては消えていくのです
やがてイエスが再臨しバビロンに替えてご自身の王国を据えられるまでは
しかしイエスの王国はどのように来るのでしょうか
ここまでの箇所では主の日は炎や地震や収穫として描かれてきましたが
ここでは最後の戦いとして描かれそれも2度語られています
そして殉教者たちにも光が当てられます
場面は国々が集まって神に逆らう6 つめの鉢に戻り
その時突然偉大なヒーローとしてイエスが現われます
彼は神の言葉であり白い馬に乗り今しも世界の悪をうち滅ぼそうとしています
ところが彼は戦いが始まる前から血にまみれています
それは彼自身が流した血なのです
そして彼の唯一の武器はご自身の口の剣ですが
これはイザヤ書からのイメージです
ここから分かるのはハルマゲドンは大虐殺が起こる戦いではないということです

かえって敵のために血を流されたイエスが来られ正義を宣言される時なので
その時イエスは神の造られた良い世界を破壊し
それを悔い改めようとしない人々に責任を問います
そして神は正義を持って彼らが世界に解き放った地獄の炎を
彼ら自身の頭上に降りかからせます
このあとヨハネは
バビロンによって殺されたイエスの信徒たちが命を取り戻している幻を見ます
彼らはメシアと共に千年の間王として治めました
その後人々の心に神への反抗心をかき立てた竜は
世界中の国を集め神の王国に逆らおうとします
しかし神の正義の王座の前で
永遠の敗北がもたらす結果に直面することになります
邪悪な霊の軍勢と神の国に入ることを願わない者はみな滅ぼされるのです
彼らは自分たちが願った通り神から離れ自分たちだけで
神なき世界を生きることになります
竜とバビロンと彼らを選んだ者たちは永遠に隔離され
神の新しい創造を墮落させることはもう決してできません
この二つの戦いと千年という年月の関係についてはたくさんの議論があります
文字通り時系列の出来事を記していると考え人々もいて
その場合イエスの再臨のあとに地上に千年王国が建ち
その後神の最終的な裁きがくだされることになります
一方で千年というのは
イエスと殉教者たちの邪悪な霊に対する今現在の勝利の象徴で
2つの戦いはイエスの未来の再臨を
2つの角度から描いたものだと考える人々もいます
どちらにしろ要点は明確ですイエスは王として再臨される時
悪に対して永遠の裁きを下しご自身に誠実だった民を高く上げられます
この書は天と地の結婚という最後の幻をもってエンディングを迎えます
御使いはヨハネに夫のために着飾った花嫁を見せます
それは新しい創造の象徴で
神とその契約の民が永遠に結ばれることを表しています
神は人間と永遠に共に住むために来られたこと
またすべてを新しくすることを告げ知らせました
このヨハネの幻は万華鏡のように
旧約聖書にあるさまざまな約束を次々に見せてくれます
この場所は新しい天と地で
人類の歴史の罪と悪の中で生じた痛みと苦しみから癒やされた
回復した世界なのです
そしてここは新しいエデンの園であり神と共に永遠の命を生きる楽園です
と言っても元のエデンの園に戻っただけではありません
そこは新しいエルサレムでもあり
人間の多様な文化が神の前で平和と調和を保つことができる偉大な都なのです
そして最も意外なのは
この新しい創造の中に神殿という建物がないことです
なぜならかつては神殿の中に制限されていた神と子羊の臨在は
今や新しい世界に余すところなく満ち満ちているからです
そしてここには聖書の最初のページで与えられた務めを果たす

新しい人間たちがいます
その務めとは神のかたちとして神と共に
この世界を新しい未知の領域に引き上げることで
こうしてヨハネの黙示録また聖書全体の壮大な物語は終わります
ヨハネがこの書を書いた目的はイエスの再臨がいつ来るかという
秘密の暗号を読者に読み解かせるためではありません
これらの象徴的な幻は 1 世紀の 7 つの教会と
すべての時代のクリスチャンに希望と励ましを与えるためのものです
というのもこれらの幻は
人間の国はみなバビロン化するという歴史の中で繰り返されるパターンと
屠られた子羊の力がそれに抗うという神の約束を明らかにしているからです
この書はこの世界を愛しこの世界のために死んだイエスは
バビロンのほしいままにはさせないと約束しています
イエスはいつの日か再臨してご自身の良い世界から悪を取り除き
すべてを新しくされます
ですからすべての時代の神の民はこの約束のゆえに
この世界の中で神に忠実であり続けられます
王がきたるその日まで
これがヨハネの黙示録です

【要約】

ヨハネの黙示録は、1 世紀の 7 つの教会とすべての時代のクリスチャンに希望と励ましを与えるために書かれたもので、聖書全体の物語の結末を描いています。この書は、人間の国がバビロン化する歴史の繰り返しと、屠られた子羊の力がそれに対抗する神の約束を示しています。ヨハネの目的は、イエスの再臨の具体的な時期を知らせることではなく、神の民に希望と忍耐を与えることでした。書中では、バビロンの滅亡と最終的な神の裁き、新しい創造とエルサレムの到来について語られています。この物語は、新しい創造の世界における永遠の命と平和を描いており、神殿の存在がないことから、神の臨在が世界に満ちていることが示されています。そして新しい人間たちは、神のかたちとしてこの新しい世界を引き上げ、神の使命を果たします。黙示録は、バビロン化した国々と屠られた子羊による戦い、最終的な神の裁きに焦点を当て、クリスチャンに悪に立ち向かい、神の約束を信じることの重要性を教えています。イエスの再臨によって悪が取り除かれ、新しい世界が始まるという希望と、神の民がその約束に忠実であるべきことを強調しています。